子どもに対する集団援助技術（ソーシャル・グループワーク）からの一考察

―音楽保育場面におけるグループダイナミックスによる子どもの交互作用からみた社会性，協調性の発達について―

千　葉　千恵美

I. 研究目的

近年，少子化が進むとともに，子どもに関する問題が増え続けている。このような子どもと家庭を取り巻く環境の変化と深刻な心の問題は切り離すことのできない状況である。

戦後における高度経済成長に向けて，社会，経済において第三次産業の発展とともに都市への人口流出，さらに人口過密による住宅問題や交通問題等を含めた子どもが遊ぶ場であった自然環境，空き地はなくなり，遊び自体，戸外から室内へと環境そのものの変化がある。

心理的側面から観察すると遊ぶ仲間，遊ぶ機会，時間，空間等，子ども同士の人間関係の希薄さが上げられ，ファミコン，テレビゲーム等機械による遊びの変化となってきている。

そして社会問題として報道されるいじめや不登校，学級崩壊児童虐待等子どもに関する問題が増え続けているのが現状である。

子どもが心身ともに健康で健やかに育つための環境作り，人間関係を発展させていく場，またその環境を作る地域社会で保障していくことが急務であると言える。

社会資源である保育所および幼稚園がこれからは重要な役割を担っていく必要がある。役割の1つには，集団の場とそこで繰り広げられる人間関係を広げていく物質的，人材的社会資源として最大限活用できる環境づくりと展開できる計画，そして支援する地域社会役割こそが，子どもの健全育成において我々が検討していかなければならない課題であると考える。

保育活動中における実際の活動状況観察では，遊びを通じた子ども同士の交互作用を具体的に実証するためと，交互作用による子どもの社会性，協調性の発達に関係しているかを探るため，仮説として，前回研究した「保育教材別による子どもの心の動きについて」東北福祉大学紀要第22巻(通巻25) 1998年より得られた音楽保育が図工保育に比して，心や身体に及ぼす影響は，表出しやすいという結果考察を基礎に，保育活動として繰り広げられる音楽リズムを媒介して，子どもとグループ（小集団）による力動関係交互作用による子どもの社会性，協調性の発達について検討を加え考察を行った。

II.　研究の対象と方法

1999年6月29日宮城県内にある比較的中核都市でもあるT市M幼稚園で観察を行った。対象児童は5歳児25名(男児13名，女児12名)平均年齢6.1±0.5歳であった。場所は幼稚園内ホールを使用し，約30分の活動時間を要した。観察者は担当保育士1名観察者1名並びボランテイア1名の計3名であった。

活動内容は身体的動きである音楽保育（音楽リズム）を保育活動で展開し，小集団のかかわり得られる子ども同士の交互作用が及ぼす効果の検討を行った。

保育内容では子どもたちが日ごろ楽しんで身体表現活動しているウサギ，カエル，ウマ，ゾウ，ヘビ，トンボ，飛行機，ヘリコプター，等動物，昆虫，乗り物などこれらの動きを表現として子どもたちが親しみ，好きで模倣しやすい動きを取り入れた。

保育活動を媒介に繰り広げられる子ども同士の人間関係で展開される交互作用が，日常生活，社会性，協調性の獲得や健全育成を促進させるという仮説を立てて，その効果を検討した。

観察方法は幼稚園の許可を得てビデオ録画，写真をとり観察し後日検証，分析を行った。

最初に「むすんでひらいて」による手遊びを媒介にピアノ伴奏による転調，リズム強弱，テンポを変えて保育活動を展開させた。

III.　結　　果

1. 図1-aによる展開では，ウサギの動きをグループで模倣していた音楽活動に消極的な子ども2名がおり，保育活動には参加せず，たたずみ，積極的にウサギの動きを模倣している子どもたちが動き回っているようすを，その場で見てうかがっているのが観察された。
2. 図1-bではウサギの動きを模倣せず，消極的であった2名のうち1名が，ウマの動きの模倣している子どもたちの動きに刺激され，言葉による誘いはないものの，ウマの動きの模倣に引き込まれ自然に参加していくようすが観察された。
3. 図1-cではウマの動きの模倣に消極的である残った1名が，歓声を上げてトンボの動きを模倣している子どもたちのようすを，じっとみてうかがっているようすが観察された。
4. 図1-dでは，カエルの動きを模倣している子どもが，ウマの動きをじっと見ていた子どもに近づき，その子どもの周りで跳ね始めた。じっと観察していた子どもは自分の周りで楽しそうに跳ねている動きをみて，同じようにピョンピョンとその場で跳ね始めたのが観察された。
5. 図1-eでは，カエルの動きの模倣にピョンピョンと跳ねた子どものそばに，積極的に動きを楽しんでいた子どもたちが誘うように近づき始め，その場でゾウのゆっくりとした動きをしながら，模倣し始めた子どものそばを歩き始めた。模倣し始めた子どもはゾウのように左

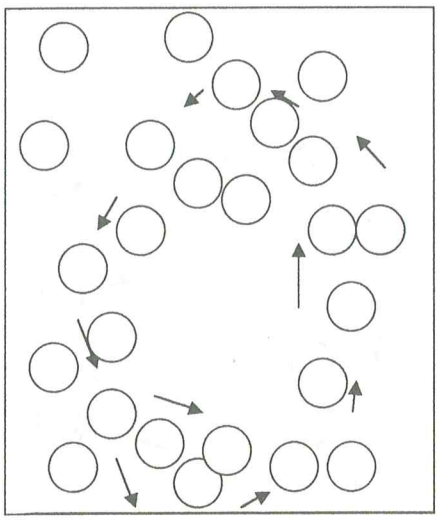

図 1-a　ウサギ 1 曲目

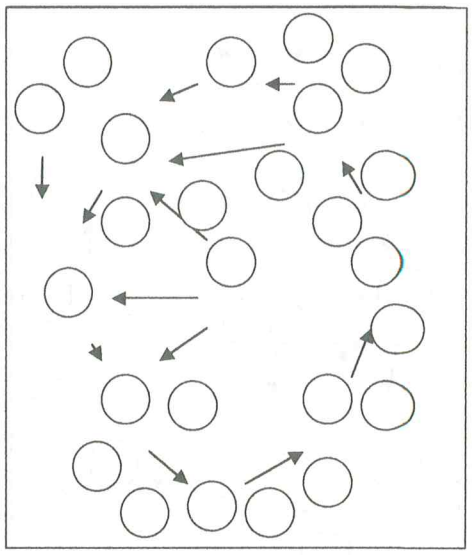

図 1-b　ウマ 2 曲目

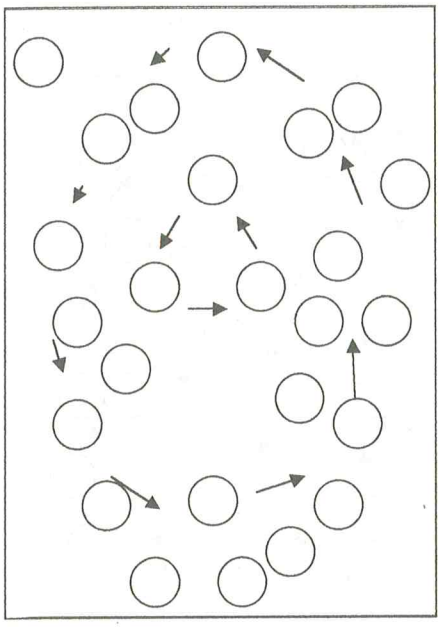

図 1-c　トンボ 3 曲目

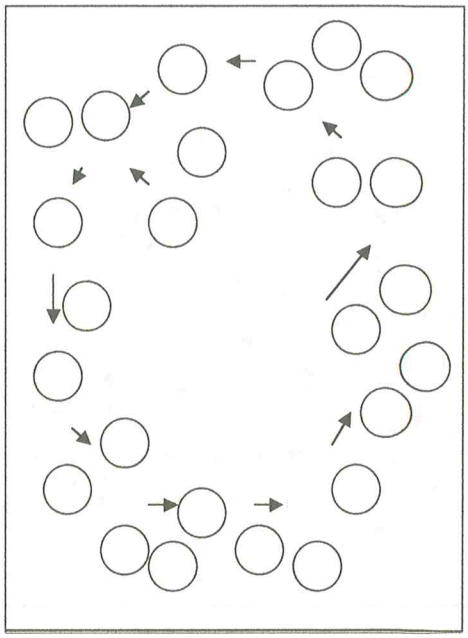

図 1-d　カエル 4 曲目

右に揺れる動きと，その場で大きく足踏みをし始めたのが観察された。

6. 図 1-f ではヘビの動きの模倣では，寝そべっている子どもやしゃがみこんでいる子どもを横目で見ながら，模倣し始めた子どもがその場から，ゾウの動きの続きである足踏みしながら徐々に少しではあるが移動を始めたのが観察された。

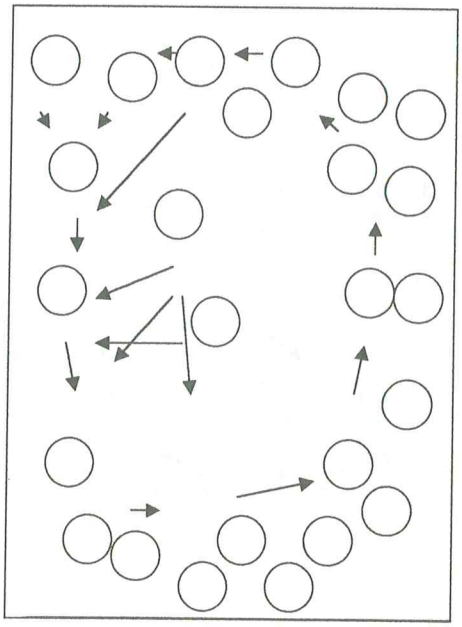

図1-e　ゾウ5曲目

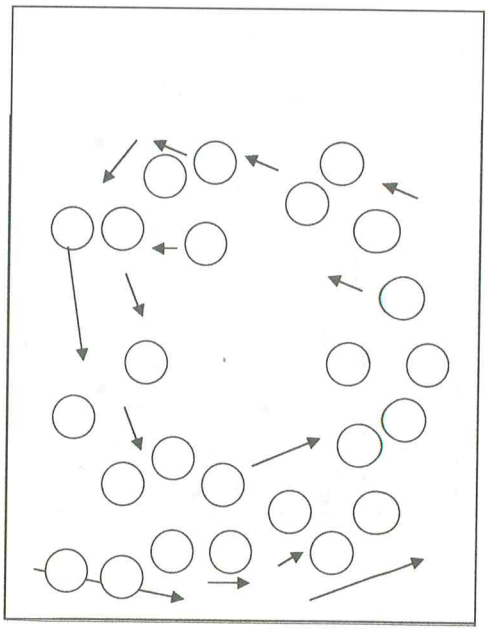

図1-f　ヘビ6曲目

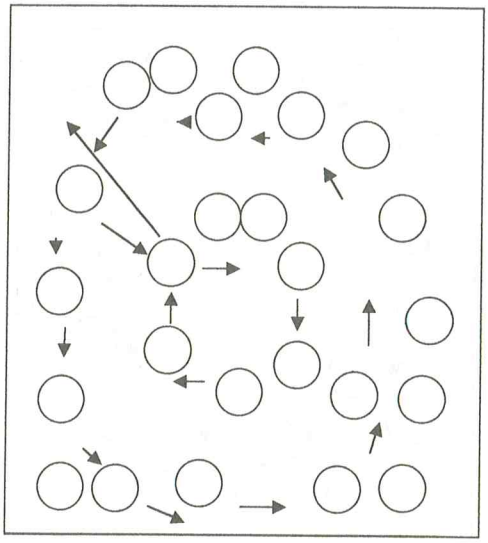

図1-g　飛行機7曲目

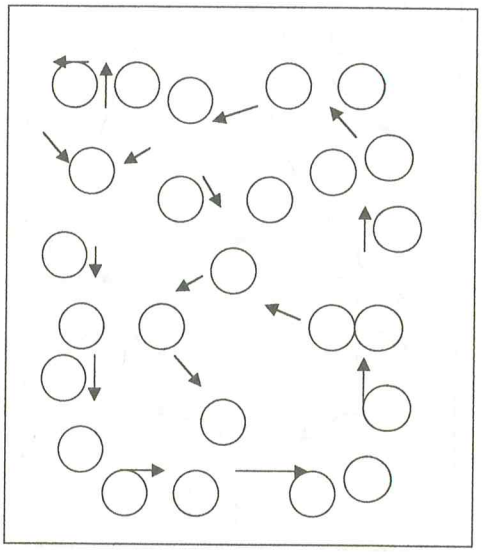

図1-h　ヘリコプター8曲目

7.　図1-gでは，飛行機の動きのある模倣を始めると，子どもたちによっては逆方向に走り出し輪が2つになった。時計回りが外側，逆方向が内側となり，互いにぶつからないように子ども同士が確認しながら，すれ違った時は目と目で挨拶を交わし，笑顔をみせる交流の動きが観察された。ゾウの動きを模倣しながら徐々に移動した子どもは1周し，最初にいた場所に

たどり着き，飛行機の動きを模倣している子どもの動きを見ながら，その場で両手を横に広げ，飛行機の模倣を始め，その場でぐるぐると回り始めたのが観察された。

8. 図1-hでは，ヘリコプターの動きの模倣を子どもたちがし始め，回転をしながら2重円はなくなり，一定の時計回り方向に動き始まった。飛行機でその場で回っていた子どもが周りの子どもたちのようすを見ながら，その場で戸惑いながら回転をし始めた。回転し始めるとこわばった顔がほころび，笑みをみせながらゆっくりと輪の中に入っていくのが観察された。

活動に消極的だった2名の子どもたちは，ヘリコプターの動きの模倣では，自然な状況の下で活動に参加し，見よう見真似で多少ぎこちない動きであるが，活動を十分に楽しんでいるのが観察された。

図式に際しては子どもの動きを主に記述した。

IV. 考　　察

1. 集団での音楽リズム遊びによる効果

音楽リズムにより，誘発されたリズム感が心身を解放し，活動全体の参加しやすい雰囲気をつくり，グループ（小集団）による活動体験ができたことが考察された。

このことは，エミール・ジャック＝ダルクローズ（Emil, Jaques-Dalcroze）がリズムによる教育の役割は，言葉や視覚によるものよりさらに力強い影響力をもち，興奮と平穏でもある音楽に委ねられる。そしてその行動は神経の感覚力のみではなく，直接情動に働きかけると述べている[1]。

臨床における音楽活用においては，音楽療法家であるセイヤーガストン（Gaston, E.T）は，音楽活用の効果には人間関係を確立，もしくは再確認すること，自己実現による自己尊重，生気づけと秩序づけによるリズム特有の潜在力の活用による効果を示している[2]。

これは音楽を人間的行動の一形式ととらえ，音楽特有の強力な影響によって起きる行動変容は，むしろかかわる援助者や人による介在が音楽，誘導によって好ましい行動変化することが示している。またシアーズ（Sears, W.W）は，音楽や音楽場面が要求するさまざま治療に，有効な行動を適切に組み立てることが，音楽活動の利用者への治療であり，行動修正が可能になることを報告している[3]。

今回利用者は子どもが対象であるが，保育活動を通じて，子ども同士による誘導的効果が子どもの行動変容として観察できた部分と共通している。

2. 集団援助技術（ソーシャルグループワーク）による効果

子どもとグループ（小集団）を対象に，グループ（小集団）を媒介した関係による交互作用によるかかわり方が，子どもの行動変容に効果をもたらしたと考えられる。グループ（小集団）による交互作用による関係が，子どもの心を動かし，行動変容をさせたと考察できた。

このような子どもとかかわるグループ(小集団)による仲間同士関係から生じた力動関係は，保育活動に参加できる特性を生かし，生活場面において子どもの問題解決や欲求を充足支援と展開していることである。

社会的諸目標モデルにトレッカー（H.B. Tredker）は，ソーシャル・グループワークは社会事業の１つの方法であり，それを通して地域社会が各種の団体，場にある多くのグループに属する各人が，プログラムによって助けられ，彼らのニーズと能力に応じて，他の人々と結びつき成長の機会を経験するものであり，その目指すところは，各人，グループおよび地域社会の成長と発達にあると述べている[4]。コノプカ (G. Konopka) もまたソーシャル・グループワークとは，ソーシャルワークの１つの方法であり，意図的なグループ経験を通じて個人の社会的に機能する力を高め，また個人，集団，地域社会の諸問題により効果的に対処しうるよう，人々を援助するものであると述べている[5]。

治療モデルとしてヴィンター（R.D. Vinter）が小さな対面グループの中で，そのグループを通じて参加している利用者が望ましい変化をもたらすように各人を援助する１つの方法であると定義している[6]。

このように集団援助技術（ソーシャルグループワーク）は，グループ内での他の人いわゆる小集団との社会的な交互作用によって，利用者に対して働きかけることである。むしろ相互作用というよりは，交互作用による効果的意味合いが強いものとしてとらえることができる。

ソーシャルワーク実践における役割として重要であり，ソーシャルワークにおける機能が方法として小集団によるグループワークによって得られた効果とも考えられる。環境による支援，目的，問題解決にむけた実践的な体験により，生活全体に目を向けた成長発達につながっていることが考察できたのである。

ウイリアム・ゴードン（William Gordon）の研究によると，一般的システム理論と人間の潜在的可能性への関心に注目しながら，人間と環境の中間面（interface）における社会機能（social functioning）部分であることを示している[7]。このことは人々の対処能力 (coping capacities) と直面する環境に関係し，人間の対処能力を高めるか，置かれている環境を改善していくことを示している[8]。この両方対応できる介入方法の必要性と，人間の潜在的可能性が開花でき，実現できるように成長とともに環境調整が重要であることが言える。

保育場面における子どもと小集団とのかかわりそのものが１つの社会資源となり，そこで展開される子ども同士の関係が人と環境の交互作用になっていたのである。

カレル・ジャーメイン（Carel B. Germain）は生態学に立った視点を上げた[9]。彼女は有機体と環境との適応的な協調と，ダイナミックな均衡や相互関係を達成するための方法として，人間と環境との間の交互作用を上げ，新たな視点としてのソーシャルワークを提示したのである。

これは急激に変化する物理的環境（transaction）の質を修正し，環境そのものを高め，生活基盤として生活している環境を向上させることを目的としている。

現在子どもを取り巻く環境の変化，特に物質的な環境変化は目まぐるしく，まさに環境そのものの質の向上を目指し，子どもが心身ともに健全に育っていく環境を整えることが急務である。

生活モデルとしてロバート・ホワイト（Robert White）は力量（competence）を上げた[10]。彼が示す力量は，その環境の中で効果を上げる方向に向けられる本能的な力と，環境とともに成長する経験を探し求める中でかかわってくる，物理的，社会的，文化的制度的な環境を含めた相互作用が，自我発達の段階で示される発達課題を達成することの必要性を述べているエリック・H・エリクソン（Erik H. Erikson）の考えに基づいている。

3.　グループダイナミックス（集団力動）による効果

グループの中に生まれてくる特性（グループダイナミックス）として，展開される子どもとグループ（小集団）による力関係で示された意図的な誘いとしていわゆる言葉ではない人間の関わりによる展開があり，そこで繰り広げられる子ども同士の誘い合いや誘発される刺激が，子どもの抱える発達課題に効果的作用を及ぼしたと考えられる。

このことは理解し合える仲間の存在と具体的な働きかけによる子どもによる子ども同士の手助けによって，子どもの発達，自立を促すことが考察できた。

ここで大切なことは，この関係性を展開できる場の保障と展開できるプログラムである。

場の理論としてクルト・レヴィン（Krut Levin）がグループダイナミックスについて小集団の考察から次のように示している[11]。彼はまず集団を個人の生活空間の一領域(a region of person's life）としてみることを述べている。彼の概念は集団凝集性を取り上げ，集団メンバーにその集団に作用する心理学的力の総量であると定義している。つまりグループダイナミックスによる集団に働く力を取り上げ，働く力を生じさせた理由，その力を変える条件，その力は集団にもたらす結果等，場の理論として集団に作用する自己調節的な変化をとらえていたのである。

そしてグループ・ダイナミックスの特徴として，理論的に意味ある実証的研究を重視すること，現象のもつ力動性と相互依存性に関心を持っていること，社会科学全般にわたって広範囲な関連性をもっていること，集団の機能や集団が個人と社会に及ぼす影響を改善するため，集団に関する研究成果を応用する可能性を潜在的にもっていることが特徴として上げた。

またグループ・ダイナミックスの研究の重要性には，個人の生活およびより大きな社会体系の機能の中で，集団が持つ意義，集団の特性や課程を個人間の相互作用という観点から解釈する契機を提供，相互作用の開始，リーダーシップ，地位，相互的義務，集団のまとまりなど変数間の関係に関する仮説を生み出したことである。

特に今回子ども同士の交互作用として示された力動関係においては，レヴィンが示した小集団における展開では，子どもへの働きかけとして子ども同士がかかわりあい，集団に作用する心理学的な力とその結果，子どもの発達を促すグループダイナミックスが示され，具体的な展開の中で成長社会性，協調性の発達が効果的に作用したと考えられる。

ソーシャル・グループワークは，民主的なグループ経験を通じて，健全な青少年の育成を目的

とする方向で発展し，援助者は集団の扱い方が，参加者の行動，態度，パーソナリテイに集団を作り上げていく過程に大きな影響を，及ぼすものであり，問題解決に向けたグループを媒介にして援助をしていく過程そのものである。

援助媒体の音楽リズムが，比較的子ども同士共通空間を通じて，直接情動に働きかけるなど子どもに刺激し合い，表現しやすい保育活動環境をつくったことも効果的であったと考える。

4.　保育場面における子どもとグループ（小集団）のかかわりによる社会性，協調性の発達

子どもは限りなく無限大に近い可能性を秘めており，子ども同士の発達をどのように守り，維持していくかが課題である。

特に我が国における次代を担う子どもの可能性を保障していくためにも，育児を家庭や保護者に任せるのではなく，子どもが成長していく環境の場として保護者とともに子育て機能として保育所，幼稚園における社会資源の活用として考えていくことと，具体的に活動する保育内容を含めた役割機能の見直しが必要である。

健全育成に向けた物質資源，人的資源を地域社会の中で作って行くことこそが，これから必要である。家庭機能の弱体化，仲間集団の希薄化，遊びの減少という問題解決に向けて，対応策を具体的に考えていくことである。

従来子どもの養育に関しては家庭の責任であるとされてきたが，これからは社会全体で責任をもって養育を支援していく視点が必要である。社会資源活用として１つは物質資源であり，場の確保，保証である。２つ目には，人的資源は人とかかわる機会と人材の確保である。子どもは日々成長し，よりよい状況に向かって生きていく力を蓄えている。

保育に携わる者として，子ども自身の潜在能力が備わっていることに気づくエンパワーメントする保育活動体験を与えていくことが重要である。

保育所，幼稚園においては小集団による活動が主として展開される活動を取り入れていくことである。

このことから集団援助技術の機能をもつ対応が，活動内容として，ますます保育所，幼稚園に役割が問われることになるであろう。

今回の研究では，グループ（小集団）により，確実に保育場面を通じて生活場面で，社会性および協調性の発達につながり，さらに保育活動から生活場面に広がりを見せている。それはまさに子どもの成長上で，人とかかわり，集団の中で成長する機会が得られたことが言える。

社会資源の活用として保育所，幼稚園の役割，また地域における子育て支援サークルなどで子ども同士が互いに支え合う人との関係，感情体験を共有できる仲間の存在，触れ合う関係作り等活動していける場所をつくり，主体的に参加していくように働きかけていくことである。

人に接し，かかわることで，基本的に人への尊重やいたわり，またどのような状況にあっても人に対する価値観をもてること，見出せることこそが人を大切にし，尊重していくことにつながるのである。

保育活動において活動内容にこだわらず活動の展開方法をさらに模索し，子どもが成長していくための方法を見いだすことである。

V. ま　と　め

1. 集団場面で展開されるグループダイナミックスを成長につなげていく場の保障

1) 音楽リズムによる活動が，子ども同士の交互作用をより発展させやすい活動であるとともに，消極的な子どもへの参加を子ども同士の間で促す動きにつながった。

2) 互いに刺激し，影響しあう交互作用の関係は，子どもの中でも仲間意識を強化させ，人間関係の発展への気づきをはっきりと意識してかかわっていた。

3) 仲間の存在に気づくこと，仲間との関係の中での自己意識の芽生え，仲間と自己との間に起きる葛藤，仲間関係による自己形成，自己実現，生活場面への発展といった仲間集団の力により自己実現を目指す方向に動いた。

4) グループ（小集団）による人間のかかわりの中で協調性，社会性の発達，自立を促す手助けになっていた

5) 子どもの健全育成における集団場面における場の保障が必要であること。

2. 保育場面における子どもの個性や特徴を生かせ可能性が開花できるプログラムの設定

1) 仲間関係の力としてグループがもつ力が大きく子どもに影響を及ぼすような活動内容の設定が必要である。

2) 交流経験することで，子ども同士の関係が深まり，参加していこうとする意欲を引き出すきっかけを作る活動計画を立てていくこと。

3) 保育場面においては人的資源，物質資源の2通りの役割から，人的資源には子ども同士のかかわりによる社会性が展開できる生活の場に広げること

4) 保育活動のプログラム計画の内容

① 保育活動への抵抗と興味を受容して展開すること

② 保育活動への興味と関心を膨らませる子ども同士の参加，誘導しやすい雰囲気つくりを意図的に行い，自然な形で広がっていく活動を考えていくこと

③ 仲間からの誘いが受けやすい状況設定を作るとともに，活動への興味関心の深まりが出始めるように，活動全体に盛り上がり展開が見られる計画設定を行うこと

④ 保育活動への意欲的な参加展開活動が出来るような興味が沸く活動計画を設定すること

⑤ 保育活動からさらに生活全体に広がるような視点計画を立てること

⑥ 子ども個々の個性とパーソナリテイを考慮した上での個別援助技術と，集団援助援助技術を両方生かせる活動プログラムを設定していくこと

3. 問題解決に向けエンパワーメントできる環境の設定

1) 参加する度合いが高まるにつれて，意欲が高まり，子ども同士の間に共通の目標が見いだせるような計画を立てること

2) われわれ意識や共通意識をもたせる，グループ（小集団）としてのまとまりが，グループ構成として形成できる場の設定を作っていくこと。

3) 保育内容においては，活動そのものが子どもにとって得手不得手，好き嫌い等参加の取り組みに参加意欲が異ならないよう，楽しい活動やまた新しい活動に対する不安，動揺への配慮を行うこと

4) 子どもの意欲をかき立て，活動意欲につなげるような支援方法を模索していくこと。

5) 子どもによっては周囲のようすを気にし，迷い，心の揺れを表現することができない子どもの存在に考慮し，子どもの状況把握下で，個々子どもの抱えている問題に共に向き合い考え，集団力を1方法論として取り入れ，子どもの潜在的な力を最大限引き出すような，環境設定を考えていくこと

6) ソーシャルワークを援助方法として取り入れ，環境設定を作っていくこと

以上保育活動内容を検討し子どもの心の動きを活動全体からの考察を行った。
音楽リズム活動に参加できずなじめない子どもの存在が徐々に，周囲の子どもの誘いに促されるように，活動に興味をもち戸惑いながら一歩踏み出す子どもの姿があった。

このことから集団による力動きによる凝集性，いわゆる集団援助技術によるグループダイナミックスによる効果が音楽リズムという動的な活動により，子どもの情動に直接働きかけ，子どもが自ら周囲の子どもたちが楽しく喜んで動いている状況に刺激され，活動に参加できたと言える。その後活動を繰り返し行うことで，子ども同士のかかわりが親密になり，生活場面では，給食の準備，活動の片づけなど子ども同士の関係に影響を及ぼしていた。今回の保育場面における子どもの交互作用が社会性，協調性の発達に少なからず影響していたことが検討考察された。子どもが人とのかかわり合いから得る喜びや感動を多く得られる活動体験を作りだし，環境による交互作用による展開が，集団生活の場で作り出すことが必要である。

（本研究の1部は日本保育学会第53回大会において発表した）

引　用　文　献

（1） エミール・ジャック＝ダルクローズ著　板野　平訳「リトミック・芸術と教育」全音楽出版社 1986年 p. 49
（2） 桜林　仁著「心をひらく音楽療法的音楽教育論」音楽の友社，1990年 p. 60
（3） 筒井末春著「音楽療法の理解」日本バイオミュージック協会，1991年 p. 60
（4） H.B. トレッカー著　永井三郎訳「ソーシャルグループ・ワーク」原理と実践　日本 YMCA 同盟出版部 1978年 p. 8

（5） G. コノプカ著　前田ケイ訳「ソーシャル・グループワーク/援助の過程」全国社会福祉協議会 1967 年 p 27
（6） R.D. Vinter : Social Group Work, Encylopedia of Social Work, National Association of Social Workers, New York, 1965, p. 715
（7） William E. Gordon, Basic Constructs for an Integrative and Generative Conception of Social Work. Gordon A. Hearn ed. The General Systems Approach : Contribution on Social Work Education, 1969 pp. 5〜11.
（8） カレル・ジャーメイン他著　小島蓉子編訳著「エコロジカルソーシャルワーク」学苑社 1992 年 p 10
（9） 同上書 1992 年 p 8
（10） Robert White, Motivation Reconsidered : the Concept of Competence. Psychological Review, 66 September 1959 pp. 297〜333.
（11） 斉藤　勇編「対人社会心理学重要研究集　1」誠信書房 1987 年 pp. 6〜9.

参 考 文 献

（1） W. シュワルツ　S.R. ザルバ編者　前田ケイ監訳「グループワークの実際」相川書房 1978
（2） 大塚達雄　硯川眞旬　黒木保博編者「グループワーク論　ソーシャルワーク実践のために」社会福祉基本図書 1　ミネルヴァ書房 1999
（3） 千葉千恵美・川上吉昭「保育教材別にみた子どもの心の動きについて」東北福祉大学紀要　第 22 号（通巻 25 号）1998
（4） 太田義弘著「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房 1999
（5） 関口はつ江　手島信雅編著　岡野昌子他共著「保育原理　実践的幼児教育論　第 2 版」建帛社 2000
（6） 高橋重宏　才村　純編著「子ども家庭福祉論」社会福祉選書 4 第 2 版　建帛社 2001